

# Prologue

## はじめに

ペットブームとは恐ろしいもので、動物園や水族館のプロの飼育係が、完璧にコントロールされた環境で飼育管理する場合でも、長期飼育が難しかったり、ましては繁殖などとは夢のまた夢であった希少な種類のホシガメも、今ではペットとして流通しています。そんな種類のホシガメを衝動買的に飼育を開始する方や、偶然...いや、正確にはカメの我慢





強さから、長年ペットとして家族の一員だったり、コレクションだったり、待遇こそ違え飼育している方々に、せめて、われわれ人類より数が少なくなっているリクガメたちを、正しい環境や管理のもと、一日でも健康で長生きさせ、出来れば自家繁殖個体の誕生に立ち会い、生命の暖かさを実感して頂きたいと思っています。

私が、専門にリクガメを扱い出した頃は、ペットショップで売買されているリクガメ自体の種類も少なく、また、ホシガメなどは高価で、とうてい手の出るものではありませんでした。その上、当時のペットショップでのカ

メたちのおかれた環境は最悪で、吹きっさらしの陳列棚の上に置かれた水槽に、ヒヨコ電球一つと言うものでした。当然、小さなリクガメは衰弱しきっており、購入しても、電池のいらない高額なおもちゃとして短命に終わるものだったのでしょ。

いつしか、ホシガメと言う名前も、一般人の知らない、ましてや、専門の方も最近まで忘れていたのが、違法入手＝密輸として、税関での没収で新聞紙上をにぎわせることが続き、リクガメを知らない人でも、ホシガメの名前は知っているほどのメジャーなリクガメと



当研究所で孵化した子ガメたち



大切な命

して認知されました。

ここ数年で、何千頭というホシガメが、税関で没収されたことでしょう。没収した税関も飼育管理に困り、各地の動物園や水族館に飼育委託してきました。委託された、子ガメたちは、粗悪な輸送と言う悪環境から、衰弱したり障害を残したりと、プロの方々が看護に努めても、生き残ったのは極わずかでした。それでも生き残り、徐々に成長していくホシガメたちが、動物園や水族館のバックヤードと呼ばれる準備室にあふれかえっているのは、ブームの責任なのか、需要の責任なの

か、供給側のモラルの無さなのか、しわ寄せは全て罪の無いホシガメの赤ちゃんたちにかぶってきています。

たしかに、その美しさは、学名のelegansからも理解できるほどで、大人のフルサイズになっても小型のリクガメの部類であり、飼育施設が大掛かりなものでなくても飼えるという誤解からも、人気はなかなかのものです。

その上、専門のペットショップの誕生や、流通での価格破壊？などから、比較的安価（そうは言っても子供のこずかいで買えるものではありませんが）になり、入手可能となりました。ただし、ペットとしてのカメは、悲しいかな国土も小さく、この分野の知識や向学心の少ない日本が、輸入量としては世界のトップクラスだと言う、汚名も兼ね備えています。

野生の個体数の激減から、保護対策がとられているこの貴重な種類のカメは、今後、より一層入手が難しくなってくるのでしょうか。折角飼育しているのだから、大切なホシガメを、中途半端な世話で終わらせないでいただきたく思います。

これから、ホシガメを飼育しようと思って

いる方も、本書を読んでいただき、その難しさを理解した上で、何とかなるだろうという過信をすてて開始していただければ幸いです。

この内容が、そんなホシガメたちの手助けの一つになればたと願っています。

2000年2月

川上 博司

